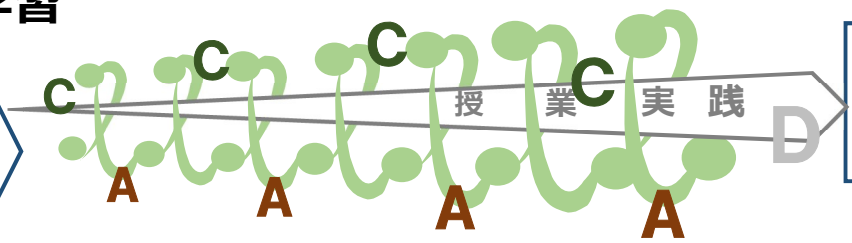
生活単元学習

P 指導計画
・終末に
「何ができるようになるか」
・個別の指導計画
・個別の教育支援計画



資質・能力が育まれ
学校の教育目標が
具現される。

C 「主体的・対話的で深い学び」の視点

□ **Check7**：本時の学びや知識、経験をもとに考える
「もっとよくするためには…」
「なるほど（納得する姿）」
「（日常生活と比較して）〇〇と同じだ」

□ **Check5**：学習活動をやりきった達成感を味わう
「できた！」「やったぁ！」

□ **Check4**：自分の思いや考えを相手に伝えようとする
「これは〇〇です」「〇〇するといいよ」
（活動に取り組む姿）（視線、表情の変化）

□ **Check3**：これからの学習活動への意欲をもつ
「次は〇〇をしたい」
「〇〇をこうするといい」

□ **Check2**：学習活動への見通しをもつ
「〇〇したら、できるだろう」

□ **Check6**：学習活動にのめりこむ
「…（無言）」

□ **Check1**：単元に魅力や意欲、憧れをもつ
「すごい」「やってみたい」
「私もあのようになりたい」

生徒の
つぶやきや
様相から Check！

A 授業改善のポイント

☞単元に魅力や意欲、憧れをもつためには（Check1）
・単元の導入において、子どもが直接体験する活動を取り入れることが大切です。体験を通して、憧れをもつ、意欲をもつ、願いをもつなどの姿につながります。

☞学習活動への見通しをもつためには（Check2）
・子どもが自ら考えるだけでなく、過去の経験や子どもの願い等をもとに、教師と一緒に考える場面を設けることが大切です。方法が明確になると、子どもは見通しをもって活動に取り組む姿につながります。

☞これからの学習活動への意欲をもつためには（Check3）
・授業の終末において、本時の振り返りや単元を貫く願い等をもとに、これからの活動計画（指導計画）について見直す場面を設けることが大切になります。

☞自分の思いや考えを相手に伝えようとするためには（Check4）
・自分の思いや考えを相手に伝える前提には、相手意識をもつことがあります。学習活動の中で様々な役割を担い，集団全体で単元の活動に協働して取り組めるようにすることで、相手意識をもつことができるようになります。
・課題を解決したり子どもの願いを叶えたりするために、必然ある対話の場面を設けることが大切です。自分の考え等を相手に伝えたり、説明したりすることで、身に付けている知識や技能をさらに確かなものにすることができます。
・自分の思いや考えを相手に伝える手段は、言葉だけではありません。子どもの視線や行動など、細かな変容を感じ取ることが大切になります。

☞学習活動をやりきった達成感を味わうためには（Check5）
・仲間や教師の評価を聞いて、自分の変容や努力に気付くことができるような終末の場面を設けることが必要です。また、対話するのは、教師や仲間だけではありません。題材に働きかけたり自分の活動を振り返ったりすることも思考を広げ、深めることにつながります。

☞学習活動にのめりこめるためには（Check6）
・無言で学習活動に取り組む姿も、自分自身や学習活動と対話しながら知識をより理解したり、新しい考えを形成したりしていることがあります。子どもの学びを妨げないことが大切になります。
・そのためには、単元は実際の生活から発展し，児童生徒の知的障がいの状態や生活年齢等及び興味や関心を踏まえたものであり、個人差の大きい集団にも適合するものでなくてはいけません。

☞本時の学びや知識、経験をもとに考えるためには（Check7）
・例えば、もっと楽しいゲーム屋さんにするためには、ボールが当たりにくいように的の形や大きさ、置き方を変えたり、獲得できる得点を低くしたりするなど、子どもが知識や経験、各教科等の見方や考え方を生かしたり働かせたりできるようにすることが大切になります。
・生活単元学習の学びを授業の中で終わらせるのではなく、学んだことを日常生活の中で発揮する場を設けたり、日常生活の中でで学んだことと結び付けたりすることが大切になります。

ここに示したものは、あくまでも一例です。周りの仲間の実践や、特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編なども参考にして授業改善を図りましょう。